

弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のようにこう云った。

——これを鑷子でぬけと申す事でござった。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙って弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分っても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者

の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛けぬき 穴から鑷子で脂あぶらをとるのを眺めていた。脂は、鳥くきの羽の茎のような形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたような顔をして、

——もう一度、これを茹でればようござる。

と云った。

内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになっていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻なと大した変りはな

い。内供はその短くなった鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくる鏡を、極きまりが悪のぞるそうにおずおず覗いて見た。

鼻は——あの顎あごの下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘わざかのように萎縮して、今は僅さんぜんに上唇の上で意気地なく残喘を保あとっている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕

であろう。こうなれば、もう誰も晒<sup>わら</sup>うものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはいかないかと  
云う不安があった。そこで内供は誦<sup>ずぎょう</sup>経する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そっと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まっているだけで、格別それより下へぶら下って来る景色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、  
ほけきょう  
法華經書写の功を積んだ時のような、のびのびした気分になった。

Read by Yumi Boutwell 6-5-08

Text from [http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42\\_15228.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42_15228.html)

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房 1986（昭和61）年9月24日第1刷発行 1997（平成9）年4月15日第14刷発行 底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房 1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月 入力：平山誠、野口英司 校正：もりみつじゅんじ 1997年11月4日公開 2004年3月7日修正 青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。